学べる道具 VOL.22

岡崎むかし館

# 和式便器（わしきべんき）

日本語にはトイレを表す言葉がたくさんあります。便所（べんじょ）、厠（かわや）、雪隠（せっちん）、東司（とうす）、閑所（かんしょ）、不浄（ふじょう）、憚（はばかり）、手水（ちょうず）、手洗（てあら）い、化粧室（けしょうしつ）、洗面所（せんめんじょ）、W.C、など、皆さんはいくつ上げることができますか？

さて、時代とともにいろんな呼び方があるトイレですが、その形態も時代によって変化しています。昭和中頃まで、農家では家族がくらす建物の外にトイレがあり、板敷（いたじき）に四角い穴（あな）をあけて、前方に金かくしと呼ぶかべがある和式便器を設置し、便や尿（にょう）はその下方に置いた桶（おけ）や甕（かめ）にためて、畑の肥料（ひりょう）（下肥（しもごえ））として使いました。化学肥料が普及（ふきゅう）する以前は下肥を大切な肥料として集めて利用するため、トイレはくみ取り式が一般的で、「ボットン」便所などと呼ばれ、臭（くさ）い、汚（きたな）い、暗（くら）い、怖（こわ）いイメージがありました。しかし、トイレには神様がいると信じられていて、広く「便所まいり」などが行われていました。昭和30年代後半には、下水道（げすいどう）の普及や衛生（えいせい）上の理由からトイレの水洗化が進み、腰かけて使う洋式便器も登場します。今では水洗・洋式トイレもすっかり定着し、トイレをくつろぎの場所として利用する人もいて、昔と比べてそのイメージもずいぶん変わってきています。

やきもの（陶器（とうき））の便器は、木製よりも清潔（せいけつ）であり丈夫（じょうぶ）で長く使えるため、明治中期（1891年～）以降に盛んに生産され、東海地方から全国に広まりました。少し裕福（ゆうふく）な家では絵柄がある便器が使われ、当時は特に「青と白」の取り合わせが、粋（いき）でおしゃれとして好まれたようです。大正時代には、便器の形も四角から小判型になり、昭和になると白色が一般的になります。

くらしに身近な道具は、時代によるいろんな変化を映し出しています。トイレと合わせて、トイレットペーパーや手洗い道具など、その歴史について調べてみるとおもしろいと思います。

和式便器（陶器製染付、明治末期）
岡崎むかし館蔵

＜参考文献＞　『昔のくらしの道具事典』岩崎書店,2004 年　『日本民具辞典』日本民具学会,ぎょうせい,1997
INAX ライブミュージアム HP：http://www1.lixil.co.jp/kiln/（2013.04.21 参照）